源屑物語

全

帝國圖書館藏
600
174

曾イ門 弾 600 巻 174

藻屑物語ハ浅草寺ノアナタ今戸ナル慶養寺ノ
作物ナリトゾイフナル シカレ尼其作者ヲ知ラズ 沾涼ガ
江戸砂子巻ハ二慶雀寺ノ條下ニ当寺ハ浅草西福寺ノ
境ニアリシ片 伊丹右京 年六 舟川采女 年十八 両人討果シ名
コトアリ 藻屑物語トイフモノヲ事ヲ記シテ当寺ニアリト
イヘリ 彼慶養寺禅林ハ予ガ外祖青岳潭 俗名吉尾門右衛門 本姓渡辺氏ハシメノ名
文政細川采女正臣ナリ 寛政三年二月十五日没ノ墳墓アレバカヽテソノ事ハ周ナガラ
未ダ親シニハ見ザリケリ 亦西鶴ガ男色大鑑 貞享四年ノ印本
八全部ニモ 伊丹舟川 両少年カ枉死ノ顛末ヲ載セタリ
顧フニ件ノ右京采女ガ事 当時人口ニ膾炙セシナラン

コノ頃マデハ戰國ノ餘風ナホ失ズシテ人オノ〳〵勇敢ナリ
コヽヲモテ女色ヲヌルシトシ男色ヲ歡ベルナルベシ男色ノ
人道ニ害アル女色ヨリ甚シコレヲ異朝ニ考レハ微
子瑕鄧通董賢陳子高ガ如キ一世ノ富貴大臣ニ
勝レルモ皆凶ヲモテ終ラガルハナシ蓋男色ハ人慾ノ
変ナリソノ自然ノ情ニアラザルヲ以天コレヲ妬ミ神
コレヲ四訓スルモノ欤然レドモソノ起ルコト既ニ久シ野史
ニ周穆慈童ヲ寵スルノ説アリ戰國ニハ衛靈公
弥子瑕ヲ寵シテ列國ノ諸侯ニ侮ラレ漢ノ時文帝
鄧通ヲ愛シテ銅山コレガ為ニ空シ晉ニ至テ又ス
マス盛ナリ史ニ又イフ咸寧太康ノ後男寵大ニ興
女色ヨリ甚シ士大夫コレヲ尚ボルハナシ海内倣傚(ナラフ)テ夫婦
離絶シ勤(ヤモ)スレハ憤怨ヲ生ストイヘリワガ邦ニハ男色
空海ヲ權輿トストイフ俗説アリシカレドモ考據ナシ近
世天正以降男寵最(モ)煽ンナリ上ミ朱門ヨリ下モ白屋
マデオノ〳〵コレニ惑溺シ命ヲコレガ為ニ捨テ悔ボルモノ
アリ
聖代靖治マヽニ貳百餘年文道大ニ開ケテ男色
ヤウヤク衰フ夫婦ノ愚モ其至レルニ及テ聖人トイヘ
ド知ラザル所アリ況男色ヲヤ明ノ周文襄姑蘇ニ

在シ日男ニシテ子ヲ生リト雖ルモノアリ公答ズ但
諸門子ヲ目シテイヘラク汝ガ輩コレヲ慎メ近来男
色女ヨリ甚シ其必至ノ勢ナリトイヘリトヅ五雑俎
ニ見エタル宣ナリ李卓吾嘗雞姦男色ヲ謗テ
木犀花ノ嘆アリ近日ワガ邦ノ男色ヤヽ衰タルハ
泰平ノ餘澤ナリ戦世陣列ノ代ハ女ニ耽ルニ遑
アラズ是ヲ以男寵興ル今テコノ藻屑物語ヲ看テ
戯ニコレヲ批評スルニ其妻石点頭巻ノ十四ニ載
タル潘文子王仲先ガ事ニヨク似タリ且徐ニ其顛
末ヲ思フニ右京ヲ殺スモノハ采女ナリ又采女ヲ殺ス
モノハ尼馬助ニシテ主膳ヲ殺スモノハ松斎ナリソノ禍
胎全ク公ノ男寵ヨリ起レリカヽレハ是彼オノ〳〵
罪アリ夫信義ヲ朋友ニ篤クシテ忠孝ヲ君父ニ
薄クスルモノハ情慾ノ迷ヒナリ件ノ五人聖人ノ大道
ヲ知ラズ迷ヒ究ルテ愚ナリ義理ニ暗キ故ニ
必至ノ勢ヒ自ラ禁ジ得ズ忽地禍ヲ釀シテ死
ニ至テ悟ラズ是當時人情ナリ人テノ人ハ然ラズ
昌平ノ民磊階ニシテ労ニ堪ズトイヘド亦餘力ア
リテ学ブモノ少カラズ是故ニ義理ニ通スルヲ以悟ヲ
大ニセズ文道開ケテ淫邪ノ道閉ツ是自然ノ理ナリ

但浮屠ノミ。今ナホ男寵ノ訾アリ。怪ムベシ。夫レ淫
ヲ貪リ。慾ヲ放ニスルニ至テ。女色男色異ナルコトナシ。
龍蛇ハ螃蟹ノ穴ニ入ラズ。虎豹ハ狐狸ノ野ニ
游ハズ。男童ヲモテ女色ニ換ルモノハ。龍蛇ニシテ
螃蟹ノ穴ニ遊ブガ如シ。俗客ダモナホコレヲ誡ム。
シカルヲ浮屠氏ヲヤ。予コレガ為ニ嘆息シテコノ書
ニ蛇足ヲ添ルモノナリ。

文化六年己巳正月晦日書于飯台隠居

瀧澤解

藻屑物語

花も實も色あるをしらて自からその枝をとりなふされハ
今の御代の御後見とゆゝしく殊に時めき給ふ櫻川将経の
御まへ穴須日みるゝつらへすへし給ふ童に伊丹右京ふとしえ
ありけり その様い笑まる心をれにしも物のあはれをを
しり春ハ東叡山の花にみ心をとらへ散なむ後のかをし
花ひ秋ハ隅田川の月にかこちて紀貫之忠岑がしらべ
かかる叔詩ハ杜子美李白がいきを慕ひ其外のしの
花もさ 拾遺の寵すゝ林女くう秘を宣
王の道をも知らずあまりの顔淵なんとさへかうるひ文武の道をも

曲亭[illegible]庫

る路が勇をゆくさ名いへる人きく人らやまざるのみ
かの光源氏の君やうく左京中将なるど名のことく
いとゆゆしやんとてかの者人くもこの右京よりなくぐくそ
まこあれ祖もあくもやさとびうちもくよ人毎よりひを
富士や浅間の煙またくよ袖のみるとよ唐土舟の家と
ぐりうたくよ人のこゝろ行ば上ようも叶道かく
いやく先寒寺異敵ハ屋の人に葛城の高間の雲に
ゆをなるやまく江いひとんゆもるく右京殿よ十八歳
の春風静なる夕つる南なるの格子あけさも脇息
を殺ケ光の玉りなくるよりるぐえんとるるあるひいと

ろくけいいんよりあ区新ろく又なるど流をるくとる
舟川泉女とのるるの方るるぐ光も十といくく又八の井
もあやうけもこの玉の様うるりく品人なるぬそのとるり
なるる彼右京が脇見るるとれるなるを一ト目ゆるるり
ゆやどひ差るもるく現ともるくさ宮いくふゆるよ覚
ぐそけくめづらなる源氏もよりせのあとのひろけ
右京かくちんこたさけばとよ品ようくみくこ宮
敷くるとづめこそ人なりの園よ入けりしこちなれとど
しはこそ品ひの孫とれなるぬ新ろくけくこそうるひ
品ひこるる陽もるく病るぬ座よくち臥ぬすぐ

おもひあらじ蓋は蔀やわたしもまさらぬ玉のをかゝるやまづかく
一しれ其傍の服にさへまぎりちりかゝる月日ぞすぎし
まつぞて小夜の中山なかなかいつる人をおもひ見え海士の
刈藻もみだるらんとそへえるる友なる人もなかるに
心を慰れど日にまし物思ひにやつれゆきて人々ら
驚き今はかくてはまれまじと醫師にまかりて
ころぬるいかゞはせんと評したる折から右京のかれ人と
いざなれまして病はいかでさはらで薬のとゞめて
ゆかりの人訪ひきたり語りて居まらで心安し
むかしより御とく庭の桜咲きもあまさでつれなき

ほろほろ春もみゆるし月となくさめまつへと試りふるかある
とは我の志もて友とちの居る歌りし寒中も宗室
もちよおもてもなみに飲みとゞまらずその外の内ひ
みも右京の男よりめでたきあれとかへえまるかぎ
人とむ殿中に志賀へ松島とかの著寒中浅からぬ
いひかよふなかなき目をつけ人とかへりし後なれる枕に
近く掃りつかるる御方の桜しきいろいも何と分
かへることろにかりしるるあらねは残りはつゝみかくまし今
語ひ人との中まだ思ふ浦の蜑人ならねもいとはし
きかれし顔つくるもありしその枕にも罪深しとぞ

神奈川ハむさしなり 原本上野ニ作る非なり 末の段ニ来 女ハ品川ニ 母の名を あけとよみ あらためる也

さまざまに弱りこひわれどもあはぬ戯るゝ何とて何の
うつゝをさまるや待らんかゝる悩ハおさまる時よりあさまし
などいひ給ひしるもあり風情こそ猶見乗ず依
その後ハおよふれ共みえず度々弱りにけり猶淺を
拘もえいふずとうちふしぬさればこそ日々悩み給ふ
上野国神奈川の辺に住める父母ひそかに物をこひ
心を定かねけるに人のおしへにまかせ耳にとまりし急ぎ
博士を請じまするに秘文を唱へ申し いと心易
のゝべし この御悩ハ玉の緒の絶なんとするぞ
其身々首つかさいふを聞ハ物のけといひ何をか霊

とらえ給ふまゝ貴き聖をまねき加持せられよとや
なる其頃天下に秀し上野の天海大僧正浅草寺にて
中尊捧價を設て二夜三日の護摩を修し給ふ母ハ
又その国の大社へ安穏の祈願をなしける處の
君ハ初瀬へ詣るとて歩行のきぬのすそひるがへし給ふも謹まず
よりなんとてなをまうづる左馬助もいとゞ心を尽くす
さるゝの祈念なからも空しかりける中にも池上本門の日
不動尊に抗ひいふを又世を思ひ利剣をもて
黒龍院をたのみて二七日の護摩をぞおこなひ給ふ
多年功徳時をうつさず悪の奴のてげたきも失せしハ

仁 セラレヨトヤ云云

高行くとうえうれば八所寺所にもあるべくこそ
かるる遠寺の鐘の声告ぐいとあはれも始めるあた
りやあらるべとよみし昔を思ひ出
人さへぬひふるもれ竹のうらの起き伏すふん
夜もすがら春のあのいとあはれなる降るとも
つもるとなく降る夜のあるは思ひ解ける深きそ
かるべきなる香炉をしよせ奇南思かるる
出る人よ なるべくこいと高くもまさる
なるべくるいとも行き白いるる前の
門外よ声るまあるいつの夜も深くあるべく唱へも

いとあはれあるべく
いつの夜も深くとあの袖もいとぬれ始ふん
今宵もとや成の刻ともなるあるとの人をとむるあの声
あもと思ふる人もあるべく又ハ物のなるあるも
やと羨しく世の侍のうち猫のなくもあるも
思ひ出れ知らぬ唄日のれくと蛙の声もいと物寂し
世居るるよ松のあるるたくべあるあるべく小鼓のあるの
いとあはるるべ世のうちの人のうちとびあや
なるなるあれたるとえとえ高の訳れのつる猪は
こそ細くも形つてねとくるべ侍る書とあ又ある時に

ちりはくも彼人の名を今のよる迄よみつゞりなく
ひとり寝の枕よちり積りく今ハ千年なるもなりぬ
かゝる歎よ書付し短冊をたゝみおかれしさればこそ
と云ひつゝらみくらしける或夜人きたりし後結ひまく
来世と思ひつゝさまよひきてねどもいひそそらち根ける
拾ひあつく数なる所の御風ぞあざるゝ人の心といひ
なりく親まゞし錢を隠なりくいてもとにて比日生
るの命まよ今なゞいつゞりあり拾ひよ拾ひ給ひし（イニ露れ）
るゝ命をよもきれハきがたし思ひあまりる心のこと
いかぶとひて世をもたちげたある所をあげよや恋しる

ま見よ父ぬらひらし昨世の中のあちらし女きハ命のつらき深き
いひあまりるまゝ歌りよみしを書きとどもげなや思ひ
むかし夫いもあれかくもあれと御世ならひさしと京
折々なる枕をなるくさもあれ此折今ハ世をある世ならも
まけるぞさし思ひく哀れいひかねひろるぞさるゝあれ
昔より此道ぬハいふる女御と云達もふかけし浜
おほしまるやきハおかしうそゆるよ朝夕うち文ぬあらひ
くりなするさも輪廻深き人のんハ或人の親達へても
苦をうけかく恨を思ふ世ぬつる孝の一字なきされたる
我かよく身躰髪膚を父母よりうけたるにうひ（毀）傷る

さろうとなりてあり
しるあくまでこの人のみやとさもあらば
は罵りうり、その時分一起をうこころ亂れて正義と
ありあるとぞ、武家くよりうたげくこうひとをうれ
ゆや軍の兼盛ぐ忍びたのあてそうひとれへ
ふくあるりは忍びそうづたあるべ右京をとひとあ
より、魂のやくは登り足のうの醋をおぐえびいつる
武あるひの庵は水沈をたるすぐ海ーやいる
高祖理のたずとうあをうるみやとうもスムを
そうたのうたのうの通りあるべ皇のるるとは玉垂の
ひ嘉むるの使りはつたくほのりとあたは月分の

眼いらげるうるを策ぬんと拒ういるあ
も絶えの別れぬべーさそれは彼人のも科をあるる
は仰うさたいとをを海分も亡んとうるはあ
たとへは軍乱の折ぐ敵みそうんぐさちひ寡
逢英泉の後は越た絶の奴となるとた武
勇をたげむ本意なとば今治平の世をいる我
分のをそるくうのたそ宿意なたをたく
淵は沈むるはあるはしまとも甚の後を貫た
君臣の道は迷んや強のかく相をもちあた
命ーの社の神も照ん抜あれたるうのうた我

命さへいとまあらぐれども色香の世界を文学
八幡宮の流れを汲む心の源は遠歴一休まもおとるべし
花の花厳の工が折畳の手で一筋よりひろひ初め
人のあらんるものと夫のことをとりそこなひぬる
さわりそれたる人の心をもとりなすを花を
ちせつ富貴那の弁をもて濃をとられた馬助いと
けうとうとうとう浦あらく作りたひまれなる山中に
中あるるうれしの及ぶ所まで去なずる所
うの位をくなりのつも世の中のおひなる仏ぬる
門徒宗で悪るる千年をまるの振いぞ人のいかさま

やうに作り若い人をこれ義経の意風あて命
を云甲斐なくもうるひ作るよるで世のうきみもち
をー世界今死にて浮名を東のそる浦ーいたく
あわるべあるとあるる嘲りとうけ面を文級の見る
見せきたるあも何なるとこれ心をつよるる犬の尾
を作りて輪廻の作れたるなんなどよあり人ひとき
心をつくるも布る見て凝の色作るおくしてのおる
あるとぐ約先とぐるよれとほのあしんちゃんとあて
立出るを三ぐ押とあいやたれの猫ぐ作るるや
作るといで耳もとあれた馬助と立久りぬ彩て

踏まえ、合戦の人もなく、春のあけぼのの霞あけぬるに、
ひとしほ、ひつぎ、国なる月を
惜しまぬ命よあるにまかせて、月のくまなきの影をも
又、ふる人は、惜むに、なるまま、戸を風の吹
うちはらひ、行き、なるに、なりぬれば
花なりも散るとて、とて、さて、ふんえて、ぬるを、
又、東陣を、聚り、ひしめき、近く、消ぬ、
千かずの陣、電、浦、さひ、
長、ふれ、ぬ、き、人、あり、
切、

此條り脱ヵ

鎧、脇、ひ、ま、ま、何、
ぬ、ま、び、又、ま、ま、
の、悩、ま、ま、ま、ま、
観、政、要、の、ま、ま、
な、い、ま、を、ま、ま、
語、ま、ま、常、ま、ま、
こ、ま、ま、ま、ま、ま、
夜、の、ま、ま、ま、ま、
ま、人、の、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ぬ
ゆかずして亭人にも世のうるはしきを出でうるに海辺
に人よりもまさりて幸に知るふるく亭一竹と天卿
日カ
志のやうなるを慈しうしてあるうるはしきはとてかたるを
きてうらうらと紅ふかき花のかげのとるもとある
ぞうるるんのうちを書こあくるの風に
引うつる心の実に陸奥のうつるあるの神のあるる
と郷に至りと帰りうるる人折り其度に知いと
あるく人間をうこのひくめうるこ折るとうるる
あるど一十日二十日と秋の中より知るうるためひられと
あるるの陸もるるうるくまとこの伝めをなんと
かの秋に惜あるよりも知るうるあるるうるる右
京南おるるの元に近くに知るくいるるるくれふ
咲ても折り花散もるめ年まるる新しの
風に元るめ京都のうるるれまるるれるくれ中
るるる倫の琴引るる青房る船を仇うるる
きくく絵りるる後宮のくるるる
絵るるふるのるる絵ふるるるるるる
と朝に見るるるるるるるるるるるるる
咲るる他に融も心にるるるるるるるるる
おももるるるるるるるるるるるるる

おくかたなる人もあり。そなたなる人も
投入(かたて)給(かのか)へ。人もとかくことをそなへ。市立の庵くへ
入るる。ものもの迎のるるりしや。御あるく蝶を振
いるせるやうにひかるる。神の悩める人あるべく
出仕しのひ。世の人にを顧ることいひそそくくれい
蝶いそだ立くく。あしてるもつとくくみかう用れい
いるる白紙もくく人間を見ふとそそう作あふ炭
星の遊戯も見ひるるべくくなるくくいるぎ
出動しのへ。とひそとハ来世世るもうとつげるく
一方なるぬ伊いるるいる作んやくく湯あく振り

出動しる行ハ初めじ女るる人くめつじげるまり。るるる此
変るるる合を助りるる月知るるるといるるつ
よりるるもそたんれなるくるるるくる只るるるるた
立るるるるひるる。

十四日。そもそも初めじるるるる通夜をるるぬるる
と京くく光陰をるるしるるる。立るるのゆ彩のるるる
ともる春のるるるるるるるる御音も今るるるるるるる
ものるる時しも暮春。
将軍家櫻川の行幸のれたなるるるるる作
出るれ卯月上浣るるるる御親戚るるるる貴と

二百人
なれ
あれが
男色
大鑑八
えびき
う

なぐろ氏山縣ひく先佐々木の人々あり土井大炊頭井伊
掃部頭酒井雅楽頭同伯耆守松平伊豆守阿部
豆州同對馬守朽木民部少輔中根壬後守安藤
板澤ゆ出羽越中守大田備中守三浦志摩守久世丹
ゆ酒井和泉守此度佐倉侯柳生但馬守井上外記
少輔殿ゆ佐々木右京亮永井信濃守始皆所司代
安藤右京進小堀孫市立花立斎浅田出之助
郷法印道春武知法印新庄文書頭同上野
武蔵大信左衛門浅井中務少輔信濃守筑後守令地院ゆ
中山左兵衛ゆ此度東海道ゆ沢方如為所司代長井

宗信内匠頭福島左衛門大夫ゆ畏る向井将監蔵(ミツ)
弟の庫坂人吉郎新の右ゆ駿ゆ被(イニ)の新法勘員の
門弟を浴びて結ゆる一巻
将軍ゆ御使よりのもてれ水ゆる用ゆ
酒ゆ行るゆ宗ゆ己淫ゆ人界のゆ人々
佛ゆ問ゆ今ゆ問を
佐ゆの人数凡八百余人とゆ
あゆ世ゆ人ゆ佐ゆ所ゆ
なゆ世ゆ人ゆ宗ゆ西国ゆ
場ゆ佐ゆ人ゆ足を

御前へめされ候御古器どもを御はたごひまと
なる各器等舟屑御の御業又なひ義光の御力
ゆゑ月帰りたるの御馬を洗ひ紅の着を掠みて舎人
八人あり〳〵牽せれしをとゞ掠りたる宮やあるあり
てそれをとる叔父の後世機嫌うるはしく六月廿
宮さまや卯月の神よ新嘗祭一数〳〵居を御覧じてふる
の数をゞあるべ〳〵なる

帰雁　紅葉の新嘗祭をあれこそ居
のひとをとる

居来　御居来しの元九月よりまをこそ

助

ヒヒ

形をあでゝ〳〵折をゞ御前よ作りて大殿立ち文
歌後掛居をれ居もつまつりをゞ御前〳〵
出るひ御生作りをゞ加後助をヒヒをれ御
上の撓をゞ御前右京同四位の好酒殿大
まうと猿四位の京校金指を京保〳〵見ぶ一色
松御おをれ御ひとゞ上の近人御あるお殿
をの後四位の方まをもと　ををれ御殿を武者
の殿の方御前をもとゞ設をりぬの後殿
世をりをを世宮柚をもをれて第女右京の

新たに世にうかれけるに是れハ頃のあつき義仲か身に
色ひかれて後の言葉か子ゆゑ日の出の光る扇の陰にま
いと恥しくる事をいひて笑へり
思ひも思ふ子にあまる雨雲なれハ咲く散りん人の心のおふ
浮世なりハ人目をつつむとはいへども下りの庭にふりあれ
阿武隈川の水清き深き心をよりそれとしぬ契り
となりぬれハ今ハこそや枝をつらね羽をならべんと願ふ
世なりけるかも深くいひかはしけるされハかかる中に世をも
たちまちかきくもりにける出家の身のよるべの庭にいふとのすまひ近江
によりまされし細野の左衛門ともおとなしく縁も絶ゆりけぬ

弓とりの子なるに唯武勇とするのみにもあれハ人を損め
ぬ道には太刀の柄にかけても此身を生命する人も
おほくありけれハこれ貞女をまもるに好けるまに若紀
人に座敷にありし奥しきる中に太京も心を引かれるに十
日の見ゆる恋わびをかけぬ人もなく見ぬ書の世業半
柏木の好色人もいかで女太京にあひまほしくも思ふ
あつまりたてしくも縫の左衛門ハ太京がよき手康に人目
も恥ぢて皆く見られて居ましかば人しれずいふつきも
あふぎと手なれて毎に深山の奥の蝉のなきま
くもあらぬ笑ひあるまじく口説かれても年は見

結ぶ縁あり年ふる沈あるひとへ世の外よりいとてもせ
ごしたく今まさかるまゝに武士のたゝひもよりぬ横合に
とらつるよりなぬものつきんせとう無ふるゝ武
武門よりたうるゝも約を変ずるものあるへしと
ゆるすゝ義一年何のつゝ世ぞうるゝ手行に似ること
友とする世のるゝ彼いつゝ新ゝ例業を
の節本相撲とゝるゝ新ゝ高ゝ紀正ゝを
取ゝとゝ力ゝる通ゝるゝ口伝ゝ行ゝ方ゝを変
決武士の義ゝ力ゝ弓ゝを変ゝ勇ゝ者ゝ法師ゝ
別ゝ制ゝ装ゝ強ゝ名ゝと唱ゝ人ゝ呼ゝ

をゝゝ力ゝ力ゝ出ゝ取ゝ仰ゝ力ゝ家ゝ業ゝ芸ゝ
横ゝ手ゝ仰ゝ今ゝ法ゝ師ゝ弓ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ
ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ
ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ
ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ
ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ
ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ
ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ
ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ
ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ
ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ
ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ
ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ
ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ力ゝ

と或夕方に行る家に拙者し罪なきを強て伝
とやうなを拵へも即敵の筋彼方へ知せしと
口説なれば中〻云るとも雨の降のたそかれ
刺客の花のあるたちに剣口をなれ立てもあし
てそいとをちをくれば出て元をとをとり接の
れたるに稽ものの又あるを人方のつをを深の
ありるこをををれいをを加らのなれ男なれば焼
杭の物つるをよりこの根遠く日とられ民ぐを
出て夫より右京をたをの対を拵ををれをれ
なの行を渡事れけるをあるをれをれ

いつをなく右京を年ゐ入りのりをやあれぬこのる家ま
をも行るをれ後のうをみのも深るべをあをを海ま
いんもをみる武士のいひびるれおあををやせんをや
事をいかをを。定あるいやををれ知いく事の
知つを今をいんるのを中〻ぬをを事ま後ま
戦場を出を。先をあをるを等。今をるを拵を討て
腹ををんを何のををいるあを人と事を人今決をを
人の行ををの人頃へ寛永十七年辰の四月十五日の
夜なりるを折しもの夜行度のをを佐倉方一面
軍夜を迫て拵をひいををやを拵居を

いとゝ深ぬれば右京亮の人々も眠りがちなり後手を
ゆるぶ給ふまゝの御髪の美しうなるまゝとやうなる
右京倩そうぶく立居をうちとあんする人う宵よりさら
ぬ〻とうつのうちあつ名香ゆゝ敷き袴の稜立る
取あげ貝折をとゝ〻ゝ鶯うちとうぐひすの鳴る歯こ
より燈ゆげを遣りてうあれう立居すぐ寝もせん
厚肌よりうちひ〻ひみぢ面にる扇を接ゝさ
うもたてうんなる下を声をうけうう行まゝ
笑ふのうち何うりつたまるぞ肩うう気の下
ゆゝ切迫るう立居もさすがなるゆゝ

扇を接て云云
大盤云
扇のうめうちせて立
仏

接合を掛ひたれども更うけゝ討行よ今う唐氣衰ん
踏ともも足もうゝとみゝとうとうもゝ出ぬれぬうの声の
ゆうう倒とのるをうつうゝ押へうまるうぞ右を
降る右方うう西ゝ彼はうる松はめをもてうして行ん
と嶺ゝ行よ右やたの岩山西の面ゝ片方うう月を見ゝ
ゝうやゝ大るゝで出ゝと周章ゝあゝ人ひとゝ一やゝの
燈一立の周一時の間ゝ行うるゝ建久四年のうの者
富士の狩場の将の夜〇敵を〇〇討ゝ強弱もけるも行や
とゝうれうかりしゆゝ織田の何ゝ建仁四年より
大題
右京を抱ゝ居うゝ接門屋ぞ

大題を原本に思ふ仮今大盤ふうう強なるゝ

賓客のかくも立出るまゝ無く洋々としてかみちと蔽しく
龍田川唐紅と流て浪子るゝかくて　桂程も殿をさはらく
るゝのみならず冬の日のかぎり　右京亮これ入て跡を見付ける
ミスして立出て任はもつてなしひ是大主殿ら見ヘ足れ
まんまとうけ　桂も其理非道をわかりけるも　つやゝゝ
そうまゝせうず手を返しるをみとしつれ候とて　礫を
あそこのうちに付まゝ。ひまに理のよし他国へいへへんと為め
得の用意いたしもよろしく給はり今はをもぞなと　只一筋
なる結構前向近く　家中の諸藩甚々人　賓客の
次とや時々されども　無つゞき非法のそくゝゝ　上にも忠孝を

中に上みよるすも御召のく　我上にてその事より　此儀やく
宣作は此儀のうちに　人事くも　前申へ　御ちらんとするく
兆を謹しく給ふもそれとひにかゝる者の中く　地をその心
一とのゝ事とひ給はん　又大佐と御揮駆まへ　切後候
什れ申され給へ御前のかたく　出頭の末　取ひたるを
又はう召仕のうち　委細なくし　秋峰ためのこゝかゝ
出ての見ゐる心許ゆへとにとひされは　其方にを
近頃此君公れ　誠のあかしに　朝れんやと　今はまで
一太刀ねて憤をそゝげまして　和を思ひける　心中情深く
も又やくゝもあり　主殿頭と御前へ出て　始終の

されとも詳ならす仕合ハ申まし殿へ此外さまさまと給
出され右京をいさめ給ひしにきゝ入給はす今ハ枚
又ち給ふ父ハ出羽守殿の臣細野民部といふ心なき
ものなりしかれとも今仕給へ今宵のあそひしに出てひく
遠のみを好し色をと愛しけるに今天下の権をとりて
威武四海にふるひしもの也人を殺せしをも勝手次第や
あまつされ摂州大坂表にて始まりし合戦かゝりしも
全く名利名誉のそろひしもあしき子孫の栄を見んため
なすれ今それなりし何の根のなきの此へき事を招きし
血気の踏こえ腹ふたつ破りし致を見んまて忘れし也

賦唯洞をうかへて居られける所に天樹院殿の局
刑部卿の局に初ハ東福寺の首座をたのみ吾なりて
内府公の御家中に信とて今の御旗本に先年召
馬を鞭打てさて河原の御館へ推参して其の
ほのかなりしよし今ハ右京か所宥免ありて殿ハ
何事もなく御本丸の権をとりし其近く一筋にきよし
わかものの何そや何もなりし者の昔は遠さかりの後に
てかゝりし筆にて是ハ天下の御慶とて民よりもての
様にせしも御しも肩をならへ御代のなり唐の張良
御範なりしの首に御旗を越えて是も挺南

陽侯へ参りて、いとものやさしく人をあやまつことなれば、例の伽の中にあるべきものなれば、和漢の
ものがたりにつけて、伏見のひさかたの服をぬぎて作り行くに、討ちてのち、如
いかどもとどまりて、止まりの夜のあくるを待ちて、行幸なり。
内裏、さて川原へ、拙者、友とやらんと、毎
天機院殿のもとへ、山崎の使ひ、ひとりぐるみ、
うち行きぬ。ひとりかたらぬ、ゆくすゑ、ひとりぐるみ、殺
せりの人を、ひとりて、ひとりせるものうつめたるよ
今は、淵川へ、ものをなげ、死人とこれなど、歎かれ

品川見
大海ヶ神
奉行ヶ他

別刑部を、使ひ、彼国を、屋敷へ、仕合せ、
なりなんとも、羽を、無んと、案ずるあらん
さきの日ヶ方
屋ようの、日伯ヶ品川より、毎のたび、
イニ世界
なる、神なる、ものの、表さの、右京がるるあるる、家
たるを、海上を、ものの、孤帆、一尾日、遥まで、
まるの、ひらん、又、光源氏の、御子の、浦
ヨリ上
の、遠ひ、ものも、品川の、右京のるるものの、
なるる、浦ヶ、一日、覚、思ひ、秋、ものの、ものるる
こと、ものの、うるる、ものと、ものの、ものの、
るるもの、足音、ものの、門の、あらるる、敲

左馬之が右京が切腹のことを宗安へ告げ 宗安ハ主の最期の事を聞 悲しみなげきけれど 切腹のことは定まり 天桝院殿の仰を受け内意 重信か桜川侍従へ異見 をなすとぞ 今霄志る事を 侍写の怪と なしや ともかく先 庵とあるを 宗安なり

云ことのありて来りたるに なんぞ見せし左馬之より今 先霄カ
霄志つくのこるかたし 主従ハ右京がくるしかりしその身ハ
かしも今自らもおかるに 御扶をもうけれ 明日の露
の共に文庫書ふみて 切腹仕りぬるとて 先と申
や文は此度の四月中 某か入れ
浅茅が草葉にまもるるものの露と共に向ひて消えそめける
宗安ハ只なるかり 御つぎの硯にむかひ書きそれど 皇諦
筆のあやにもえらぶ 惜しい時移りぬ 詠まんとすれども
ありし浅くとも 生者必滅會者定離の習ひとて
いふも誰か百年の身をもたもちや 惜むべきにあらねど

荒木と見えても身を ものもこれとへ
一とせるの急なれば とて使を召し杖をく
對面し 明日は殿日光山へ君の御使にて参る
御休は と申し告来り給ひてれば 又久しく
うちもつるもあるまじ 我が首途を悦びんとて
母の盃にもてしかども 身の度母盃を拍べけり
おかしくも道にてよきものよき 馬上に居ねむり
して 常にも心そえて 指に首あり
恩の死ハなけれども 情の死ハあるなし 常にそへし詞あり
らるる一命すでに 鬼神も涙し 野に水手向けり

身をたすけんためなれば川水におもねがはくはよもすがら
浮世の名もおしいん人間稽古なかりしされば古き人の名もな
みやこの華やかの川の河辺に鴨をかりする山路を分て
皆皆世の中にあやしきことを親の心のうちを
おもいしられけるよもすがらしとしとしはしと思ひやれども
そのなれ諫の言葉かけてさすがに思ひきり来るなれどもすむ
涸をせきとめて（引留）打ふる袖をうち返しあやしき何とも畏り侍る
といふさる立よれ母の門の辺にまつ立返りしかれども父の事
忘れぬ親子を老の力草鏡をみるにまで延上り果は涙
の淵瀬川袖をぬらす身のあはれさんざなきを限りのことなれや

後あれて思ひ定めし黒髪を切らんと風の鳥まどろむ
一　くまなくかの浅茅生の慶長寺へ只一人たづね行
東雲たなびく山門のあたりおぼしくかくしてようやく
一　たえず息をつぎ安からぬなや人声もしのぶるは見法師
ら集まりて思ふ涙にわかれの袖をきけ容顔いと気高き
若気のまよひて發心とさえきかずやさればこれ親なる人の
歎けれあれいとおしむるをしりけれいとど胸さき
かなしき事あれかくれなき紙のひ継なきものあるまじく
も人て集まる中にもしれ我をみえざりける人やはらん
とかくはとりに立さるべきの中思ひあまる人あはれなる

陪臣死ニノゾムトモ白也垢ハ着ガタカラン浅黄也垢ヨシヤ〔？〕レルカ且麻上下ナヘシ縞ノ袴イカヽ男也大拙ニ〔？〕浅黄上下トアルヿ忘ド大ヘシ又栂まゝ〔？〕十六才トハ若キ童形ナレハ白也垢ト紅裏

采女がこゝろ知しもなし筆の行衛に山門へ駕篭られたかへ

右京も今は白き一致の花出立白く清らかなる雪をまぞ

へたる白妙垢衣重ねし藤の袂のうら後の小袖も五色九

しのの色ならて朝顔を移しも人目より縞の袴なみ

たてしれあやりをつくしたる数々の年数蓬立ならぬ新成

の居ならずもみし昔も見よかれいとあはれもや

まりなき幸中のこころ限りなれる山櫻一際花やかなる

見まゆく継舊年花残て精待後春を心人に語れ数をも経

とゝ人の心とうち恨るる采女か千代のちぎりあるを時雨

もうらみいさゝか実説を忘んとみるのみの蟄なりしかり

八句なれして

廿暗吉門動解ゆるもしひ花は羅袖の無のりとえ光

こゝろのおもしろ氷りてまつすへと座てくくとの金

おもひの物をかれあけるる丙く和尚の手にまかせ

哭くに晴やかめぞ眾僧にもてあるをかなかでつと

のゆめ何なさらひやれさもうさけゝ顔あり座花

情のてるのそよそふるり何よつゝらへたる生死減め

とゝうらの思ひ菩提のさるのみうへ哀花容色あるなる

時本意をと遂てゝ白衲のしてをかゝて是母成佛す

あなかやとらあかゝ花の袖よりうろ色ね車れ短冊に延

筆を染辞世をかかりし

春は花ばかりをみるとたちまちに
和歌浦を流し、ふねもいそぎよろこ
ばるべし、三界一心の法、何ぞうちひのあるべき、
寺姑息もたちまちに初のえんをもれつるとぞ先居士
俗名
法名 貴そ

花童院剣切利空居士

俗名 伊丹右京 享年十六歳

とをつ、行く右京殿をば、死のうちの
くるしみの大力をいたづらんとする
彼舟川家をも
練ぬ花の行ゑ行のたばそ
出右京は太刀をもつて
ふねもろともに旧年の
事あるべきのちかと後れ出家のなりとひとりひるまく
をそれぞ神ひとり生れいくべる人間世界の苦をなさ
九やうの事のさて寿をしるもの
ようかれてうくるこのあるまのあく後の世までも
お藤をすべ作むまつ
主途の川を渡べとおもふ花の服を実立ん
ものを動解由をそめ和歌右京これ
そめこいるるのあく作るべ作ものをそ
墓ひ京くなりのて踊まる
いたどりのかるべ

[illegible]
を損して切腹をすすめ白服礼名利をすてし
馬のあゆみを護衛するつゝもの絹を変ずるあり
[illegible]
らんとしをすぐるとやあるものもひとやうもも
やはりあるべき世にてもしかるべきなり
あるべきなる所をさいさんいろ井さをきる
[illegible]門原上の玉を貫に埋もれ名を山理とかくを
[illegible]
[illegible]

あひらぐ命てたらめの[illegible]を[illegible]又人言る情るもそ
めあを世の人はかりのみをものもふはく[illegible]
[illegible]
[illegible]

この徐大
徐と文
句ちがふ
大徐あり
右京と
来女切
腹のとき
ちがふ
下ハ
舟川伊勇
が者賞
三四人男
肌ぬぎて
とき
図しる
くくる
馬陰

そこをかくろげ、花の服へ家のあが宝もたよりそこ
ぬれ袖それ先よ三途の川の渡船を作んとすぐく
腹へつたくる辞世

イミワタレ
スイニコエン

旅たよいそこれ弱もこのるそこいそやんそのあ川
くらひ金花のくくうまし花ハ五よさ一遠ひ
情カ
ちかそのうと
ちよるよ君ぐ一日の恩よ亭が百年の
よりひをあるるとりひも花ちん惜むべし悲むべし
夏の
拾六歳と十八年を一期とくく貫永の春の夢
ちかそのか
まぐ咲ぬる内の花いとやや光ちられく短き
縁や浅茅の宿と清水いとうさ酒ちちひ家ろ

ちちちの九
ちちを更ん
門四
かちちち
のさん
ちと
更ちう
男ろ大
徳八負
亨の印
本ん

ともてやてまひ物舟の行末ハ定ちれ行ちあひ
と芸難をかく髪を剃ちし五人の芸花をちんとん
の行ぐ三日ちさて不日よ二人のちをちるぐ辞世を
俗脾のうよ服つけ人の世をちひけちよ打ぬるん
を祈ちる さて志かちた医師ハ蜂をひ中して来女
とちく勢ひ中ちの上ん遠ちく腹切るべきよ中く
ちのけきもなく剣ちよ行をふとちちれて死んで
年ともちんぐれ若ん人くみちのちち涙ちち
つけよいちるのとの内ちやくまぐ刀れすすのひよく
命ん年をきのちのよのぐ刀のあちるかちちちの花

童院と業女の初穂の百文ほどなる芋あぶらよ
芋串やと所望を流しかの連俳の悼をさ
げよ彼左馬助人よりうせたるみなり
むつまじく物思ひ人を先立てて冒路まよふ身をいそせん
と書きしるしし例よりみハそれぞれ
身をいふせんと思ひ腹をきれしもの世をそむく人迄
るるぞ嘆ひ行るるよ厨の御辛も今日をいそぎ
九月末より始るるまくらつれをとも左馬助なる
ぶやまくら新人くよ嘆ひ洲ん厨の御種も遊ぶ
いろうるうためあやあひくく命を手ん物ぞ思ひ

左馬助七命セントテ直宿ノ夜書院ノヤリ戸ヲ引ハナレテ逃出ルトイフ説コロヒガタシレモシ逃去ラントナラハオノガ宿所ヨリ外出ノオモケシテ白昼ニ去ラハ人々ヲコヒヲ恐メシ大盗ハ米女カ七日ノ建夜ニ左馬助モ自殺

度くなるぬ洗人の間くを越ぬ知ぬ人ぬ
の夜人ぬて書院のやりをを引ぬ
あるぬ立返ぬとぬるを数のぬるぬ
心耳をぬ思ぬのぬやぬの人ぬ分ぬ
なれと強ぬ思ぬと欠ぬ知ぬいぬ
志ぬ左馬助なぬれぬ手紙ぬと逃ぬ
命脇ぬ逃ぬ久ぬ今ぬの中ぬ害ぬ
ぬれ久ぬ人の憎ぬと左馬助なれば逃
畏ぬ左ぬ人ぬ羽ぬ去ぬ草へ行ぬ
害ぬ久ぬ鳴ぬ誰ぬ千年の松樹ぬ世ぬ

セシトアリ
イフレガ
是たヤ

かくまで一人をも惜しとゝ、末の世まで名を残し給ふ
はゝなるべや、彼茶道松屋が孫せ一るも所願を遂し
これも是そ一道をそ創られたるとそ（イ兄初）ゝあり唯う初
のゝ月のしるべ七日ゝたゝぎるゝ四人浅草のあなと潜
しも過去の因縁とやいひん如鮮世情ふるものの
みゝ彼紀念の取ゝ写ゝ五月初よ都城
のへ送りしが（右京ノカ）母のなけれいひ井そ見ひ申ゝ義
陰よ申べかゝる我川のみゝぞ（高カ）なりしも又ゝ和しく
なりゝゝの年の仲の秋下の四日朝の雨なと潜先ぬも
ゆえ侍るあれそ侍るゝ道なりゝ過ゝ人ゝ

只君文の恵を忘れ給ふ雲の上も
厚く恢むべしゝゝの道ゝ人ゝ何ゝの
ゝゝ行ゝゝゝのゝゝ侍るゝ

この書ゝ藤原の孫麿が若年の春二月九日
慶養寺の檀越ゝ侍る仲原某ゝ抄借ゝ
を今春ゝ月ゝ有ゝ八ゝの月ゝ借ゝ
次の日ゝ月ゝゝの夜のうちゝ写ゝ
七人寄ゝ申ゝゝゝゝゝ懐文脱文
あゝゝゝゝゝ写ゝ石本ゝ

天明ノ頃ヨリ七年来初メテ常陽ノ人某氏
ヨリ奥ヲ乞ヒ一ツヲ記シテ慶養ニ
与ヘ其ノ他ノ作ハ世ニ行ハレ
ナリ西鶴ガ男色大鑑巻ノ二ニ載セラルモ
ノ文ヲ以テ只ノ興ヒ悔ある人名ヲ有ルノ
ナリ作者物ニ貞享元年ノ記録アル
ヲ以テ文章ノ巧ナルコトハ論ズルニ及ビ
ガタシ当時ノ人氣ヲ察スルニ一端ヲ
知ルベシ
文化六年己巳春正月下旬　瀧澤解　重識

總評

伊丹右京ハ主人公ノ男寵ヲ得タルモノナリ然ルヲ舟川
采女コレヲ眷恋スルノ惑ヒ尤甚シ亦左馬助ハ采女
ガ親友ナリ彼ヲ諫ズレテ強テ情慾ヲ遂サ
セントセリコレ亦信義ノ人ニアラズ其迷ヒイヨ〳〵
甚シ右京モ又罪アリ君寵ノ奏ヲ恐ルヲ左馬助
ニリ〻ノカサレ終ニ采女ト臭厳ヲ抱ク亦是忠義
ノ人ニアラズ三人忠ニモアラズ義ニモアラズ皆是
聖人ノ大道ヲ知ラザル故ニ尾生ガ橋梁ヲ抱リ
ノ信ヲモテ死テ悔ズ悲ミ哉

細野主膳ガ節木松斎ヲ媒トシテ右京ヘ思ヲ運シ
メルハ亦是非サト其罪同シカリテ其思ヲ遂サルヲ
以右京ヲ害セントハカリシハ迷ヒて〳〵究シリ右京此
風聞を聽クトイヘ共未だ実ヲ知ラズシカルヲ主
膳ヲ殺テソノ過ヲ累タンハ男アマリアワテ其智
足ラズ何ゾ自ラコレヲ御示キ已ニトヲ得ズハ主膳ガ
チヲ下スヲ待テコレヲ撃チガル若シ主膳怒リニ任シテ
右京ヲ害セント罵ルコトアリ共思ヒトヾマルコトアラバ
其罪ヒトリ右京ニアリ只人ノカゲ言ヲ信ジテ事ヲ
定ムルハ浅智ノ所為ニ弱年ノアヤマチナカヽル事タタカリ
思フベシ慎ムベシ。
公右京ヲ寵スルノアマリコレヲ殺スニ忍ビズコレ宋襄ノ仁ニアラズヤ主膳ガ母コレヲ某ノ院殿ヘ愁訴セシモ
亦其所ニアラズ内藤生ガ又内意ニヨワテ公ヘ異見ヲ
加ヘルモ亦其人ニアラズ是彼スベテ私情ヲモテ公道ニ及ス
モノナリ。
左馬助松斎又刑ニアフ事果シテ実ナラハ極テ
苛法ナリ只追放シテ可ナラン公男寵ニヨワテ右
京ヲ助シトシ却テ左馬助ト松斎ヲ殺セシハ私情
公道ニハアラズ。

右京亮ハ不忠不孝至極ノ人ナリ主膳左馬助松肩
ホハ不狂人ニシテ狂人ト共ニ走レル人ナリ論スルニ足ラズ
藻屑物語ノ作者只ソノ事ヲ述テ勸懲ノ文
少シ文辞ノ鄙俗ナルヲ強テホノメカサントテ綴レ
カバ文義分明ナラザルコトタタカリコレヲ見ル童子ホ
信義ハカヽル人ニコソナド思ヒマドフモアラントテ
蛇足ノ辯ヲ添ルノミ例ノ僻言ニヤ知ラズ

文化巳巳春二月三日一校了